

人面・足形装飾付の香炉形土器

渡 辺 誠

I. 人面・足形装飾付土器と器形

縄文時代における人面装飾付土器は、古くから顔面把手とよばれて研究されてきた。その人面の付けられた土器の器形は、縄文土器の主流をなす深鉢形土器が圧倒的に多い。しかしそれ以外の器形にも多く、機能上にも違いが予想されたため、各器形ごとに検討することにした。

そしてはじめに深鉢形土器（渡辺・吉本1994, 渡辺1995 a）、次いで鈎手土器（渡辺1995 b）、注口土器（渡辺1997 a）について検討してきた。本稿の香炉形土器に加えて、今後さらに壺形土器、有孔鏝付土器、浅鉢形土器などについても検討し、それらの相互関係を検討していく必要があると考えられる。

土偶装飾付を含めた人面・土偶装飾付深鉢形土器は、1994年11月の時点で東日本の293遺跡より443点出土していることが知られている。その時期は縄文前期から晩期にかけてであり、他の器形よりも範囲も時期も広く、かつ点数も多く、人面装飾付土器の主流をなしていることは明らかである。したがって他の器形は、深鉢形土器の機能を分担あるいは強化していると考えられるようになってきた。そのような経緯のなかで、これらときわめて関連性が強いものとして足形装飾付土器が注目されるようになってきた。

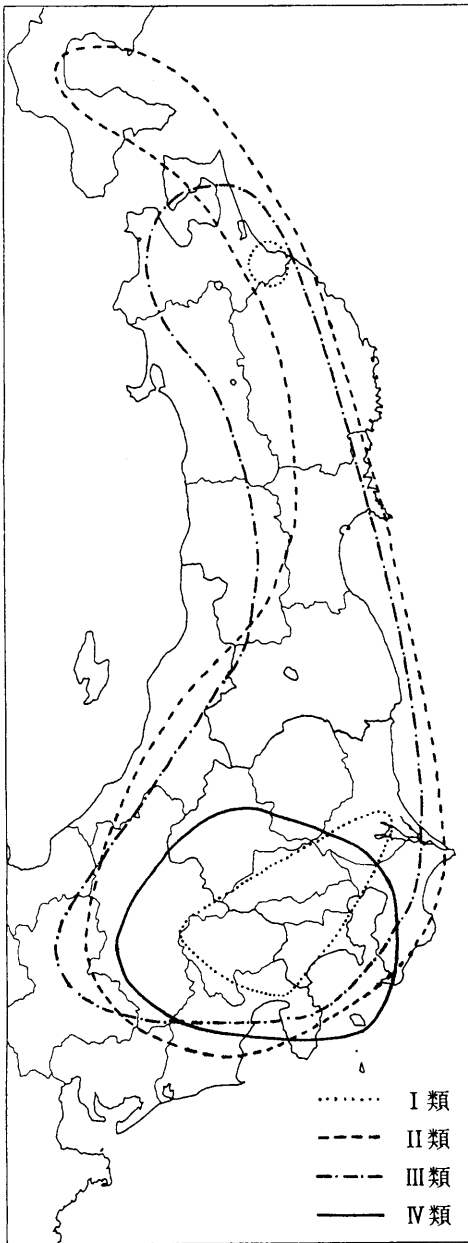
人面・土偶装飾付深鉢形土器は、人面などの付けられている位置からⅠ～Ⅳ類に大別されるが、出現の順序はⅡ類が最初で、次がⅢ類、そしてⅣ・Ⅰ類が最後である。これらの装飾の部位、形態、分布（第1図）と編年について要約すると次のとおりである。

Ⅰ類の人面の部位は、Ⅱ～Ⅳ類と異なり胴部の外面である（第2図1）。しかしその時期は中期前半で、Ⅳ類に誘発されて出現したとみることができる。分布範囲もⅣ類のそれに類似し、山梨県から関東地方にかけてである。

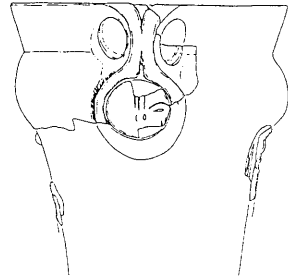
Ⅱ類の場合は口縁部の主に外面にみられ（同2）、前期前葉に出現し晩期中葉までもっとも長く存続し、分布範囲ももっとも広く、北海道西南部から岐阜県までの範囲に分布している。

Ⅲ類は口縁部の上に人面が山形に突出し、内面を向く例が多くなる（同3）。中期初頭から晩期前葉まで存続し、分布も青森県から岐阜県までの範囲で、Ⅱ類に類似している。

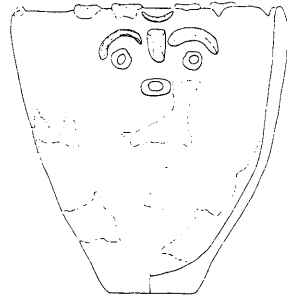
以上に対してⅣ類はきわめて特徴的である。その最大の特徴は、Ⅱ・Ⅲ類では土器本体と人面部の厚さは同じであるのに対し、Ⅳ類は立体化して大型になることである（同4）。その時期も中期前半に限定され分布範囲も狭くなり、山梨県を中心に長野県南部・西関東地方に集中するよ



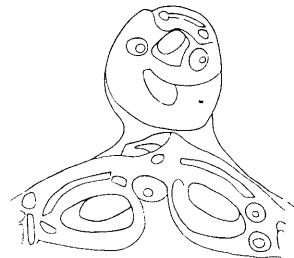
第1図 人面・土偶裝飾付深鉢形土器の分布



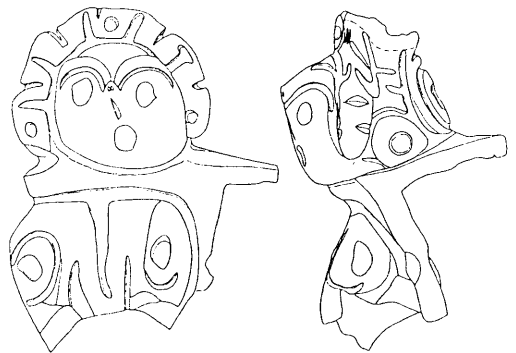
I類 (東京都清水ヶ丘遺跡)



II類 (埼玉県赤城遺跡)

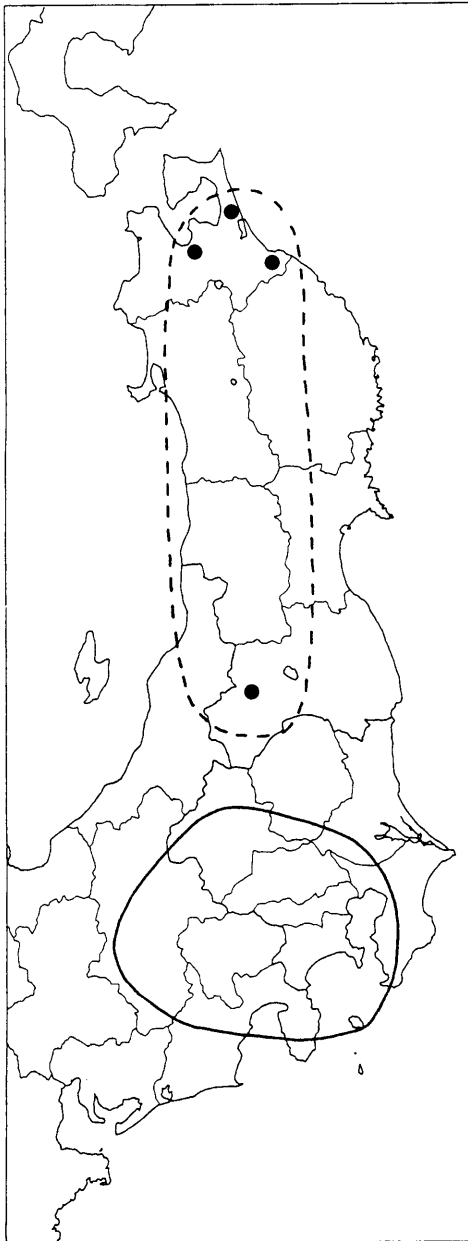


III類 (静岡県箕輪A遺跡)

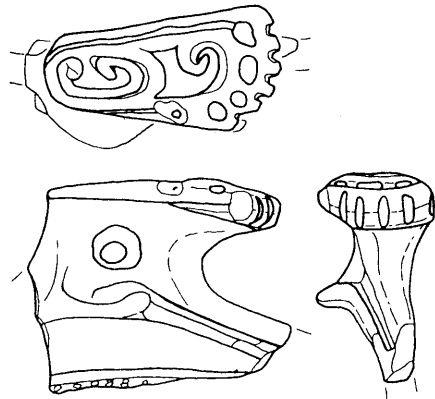


IV類 (神奈川県当麻遺跡)

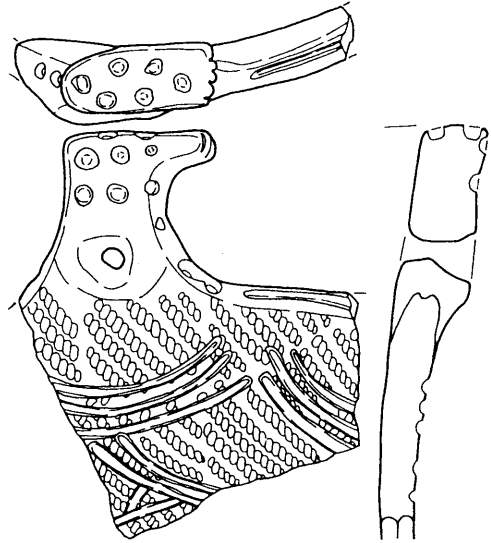
第2図 人面裝飾付深鉢形土器の分類



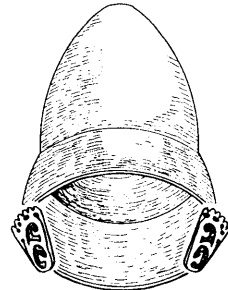
第3図 人面・土偶裝飾付深鉢形土器IV類と足形裝飾付深鉢形土器(●印)の分布



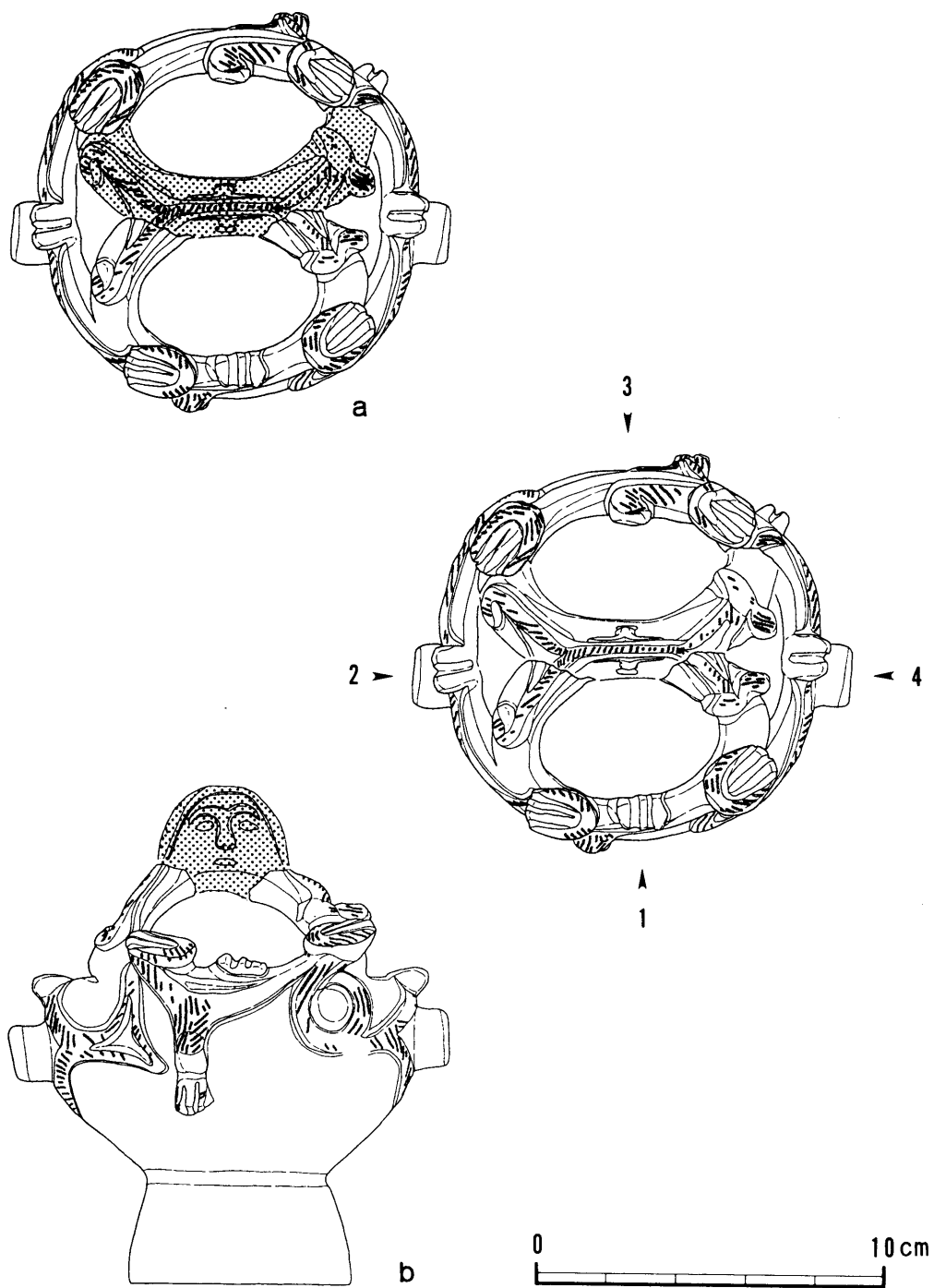
青森市三内地区



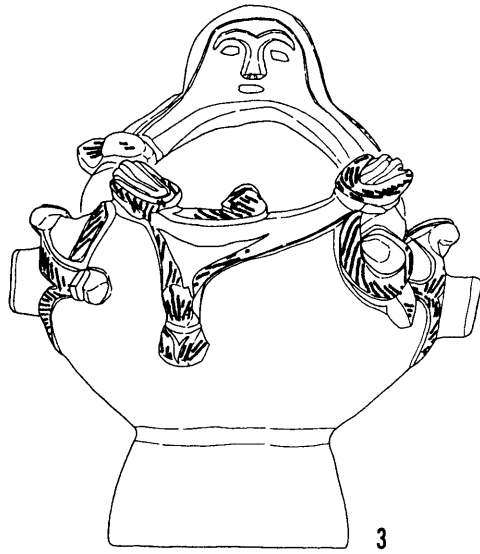
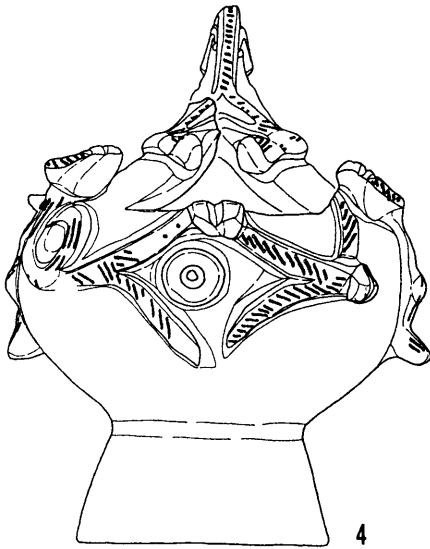
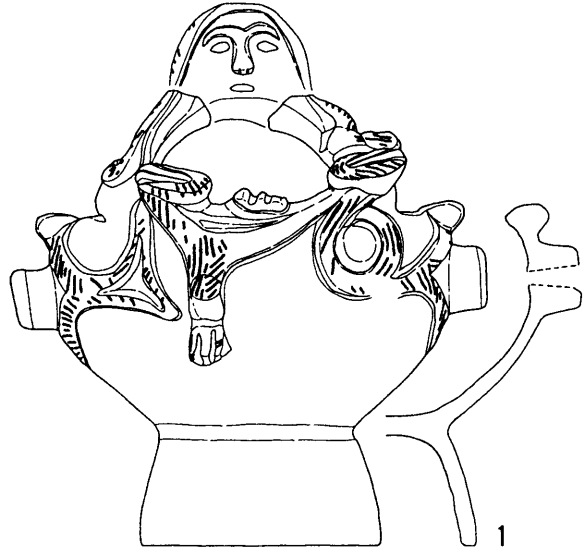
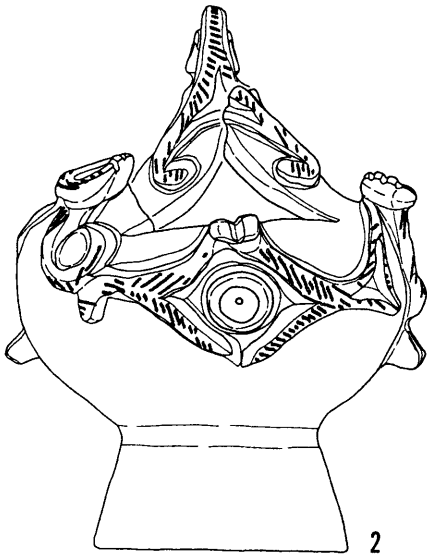
青森県富ノ沢遺跡



第4図 足形裝飾付深鉢形土器(縮尺: 2分の1)とその復元想定



第5図 宮野貝塚出土足形裝飾付香炉形土器実測図



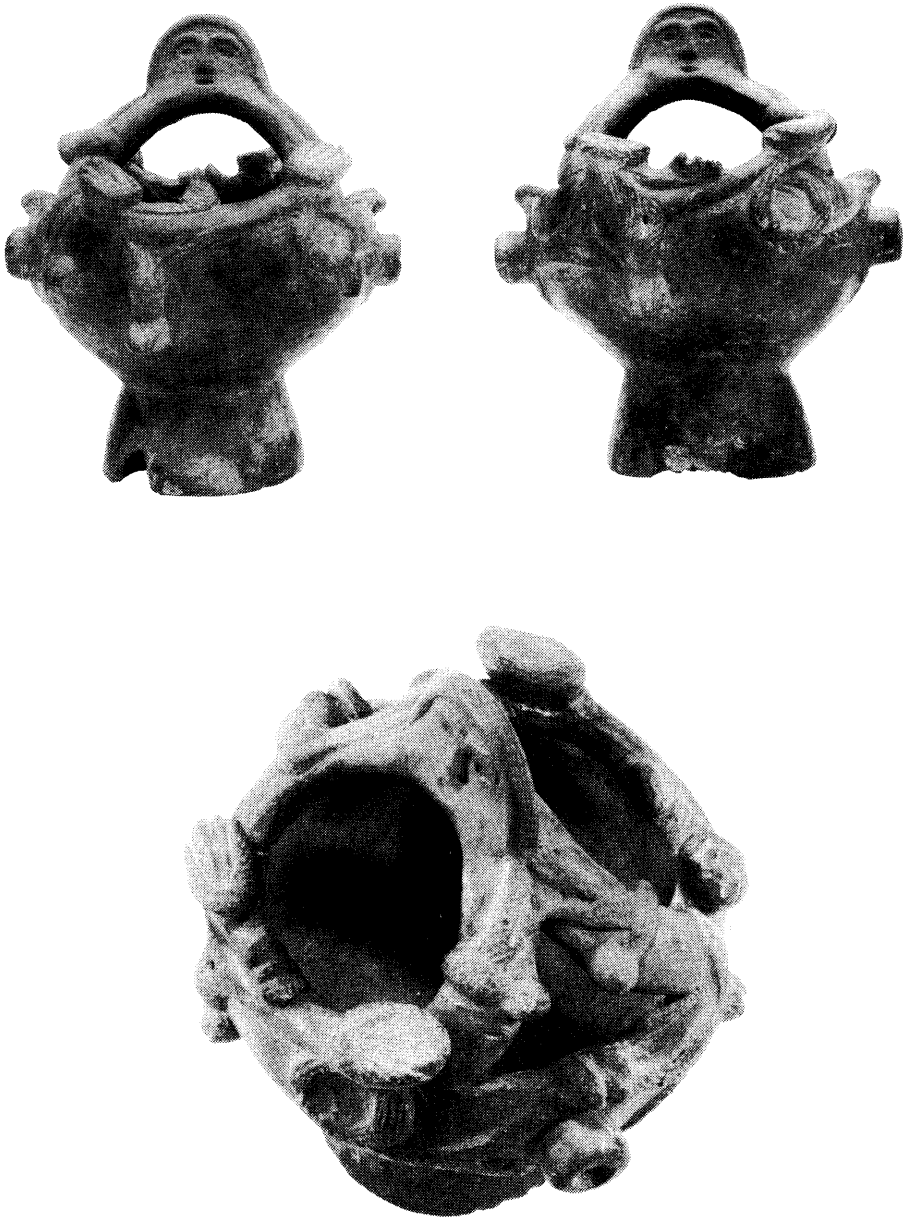


写真1 宮野貝塚出土土形裝飾付香炉形土器

うになる。

すなわち、人面・土偶装飾付深鉢土器は、縄文前期から晩期にかけて東日本に広く分布するが、もっとも発達したIV類は中期前半の山梨県を中心とした地域に限定され、いわゆる勝坂文化を代表するものとなる。そして興味深いことに、IV類のみられない東北地方にはそれに代わるように、足形装飾付深鉢土器が出現するのである(第3図)。

把手状に突出した足形は対をなし、女性が足を広げ身体から食べ物を出す状況を示唆している(第4図)。これは土器を女性の身体とみなし、その中で作られた食べ物を取り出すことを示唆している人面・土偶装飾付深鉢土器と観念は同一で、最盛期に中部・関東地方では人面IV類、東北地方では足形という形態を表現したのである(渡辺1997b)。

以上のような調査経過のなかで再発見されたのが、宮野貝塚出土の足形付香炉形土器なのである。

II. 岩手県宮野貝塚出土の足形装飾付香炉形土器

筆者が本資料を見たのは1996年7月8日のことで、他の資料の調査で訪れた岩手県気仙郡三陸町の越来支所の戸棚のなかに、無造作に陳列されていた。

一見すると足形装飾をもつ高台付の小型鉢形土器のようであったが、手にとって観察すると内部に環状の破片が2点あり、仮に接合すると香炉形土器であった。そのモチーフは同じ足形装飾付土器でも、深鉢より香炉の方がより性的結合と陰部の焼かれる表現が明瞭である。1970年3月の第4次発掘による出土資料であるが、破片が不足しているためか現在まで復元されることはなかった。しかしきわめて興味深い重要な資料であり、三陸町教育委員会の特別な御配慮によって研究室まで借用して復元させて頂いた(第5図、写真1)。

復元に際し破片の欠けている部分は石膏で補填したが、その部分は第5図a・bに網かけで示した。すなわち頂部と背面の環状ブリッジが欠けていたのである。復元後の高さは15.8cmであり、残存する高さ11.5cmである。丸く膨らんだ胴部以下はほぼ完全に残っており、台の一部が欠損しているだけである。

その台部の高さは4.5cmで、底径7.5cmで、文様はみられない。その上に乗る丸く膨らんだ胴部の高さは5.5cm、口径11.0cmである。人面を復元した部分を前後とすればその直径は11.5cmであるが、これに直交する面には注口状の突起がみられ、それらを含めると直径は14.0cmである。この胴部と口縁部とは、特徴的な文様が隆帯でつけられている。

まず前後面(第5図1・3)には、その中心が左に片寄るY字状隆帯文がみられ、その両上端には足形がつけられている。それらは前後面ともに左右対象でありかつ外側に向かって開いている状態を示している。そしてその足形の基部からは環状ブリッジが立ち上がっているが、上端部は残っていない。それらの足形には縄文の施文されたやや厚みのあるU字形のなかに、3本の沈線によって指が表現されている。したがって指の数は4本であり、5本ではない。これは普通の



写真2 尾田峰貝塚出土足形裝飾付鉢形土器

人間の足ではないことを示しているとみられる。それらの大きさは幅1.6~1.9cm, 長さ2.3~2.7cmである。

環状ブリッジの上端部には人面を復元してみるとした。それらは次項で記すように、ここに人面をもつ例があることと、環状ブリッジを女陰とみることによる帰結なのである。

次に左右面(第5図2・4)においては、その上にRLの縄文の施文された菱形の隆帯がみられ、その中には注口状に孔の穿けられた円形突起がつけられている。そのモチーフは両性の結合を示唆し、石棒やスタンプ形土製品などにもしばしば用いられている。円形突起の直径は2cm, 孔径は1mmである。

この菱形文とY字文は、間に円形文などを挟んで連結している。また足形の中間の口縁部には瘤状の装飾があり後面(同3)には沈線がなく、左右面(同2・4)には1本の沈線、前面(同

4)には2本の沈線が施され規則性がある。これらは足形上面の沈線と類似している。

また環状ブリッジを示す前後面に対し、左右面も特徴的である。ここでは前後の環状ブリッジの形成に伴い必然的に三角形をなすが、その上部には頂部に続く三角形の隆帯が挟み込んでおり、円と三角形の組合わせのモチーフの重要性を示唆している。

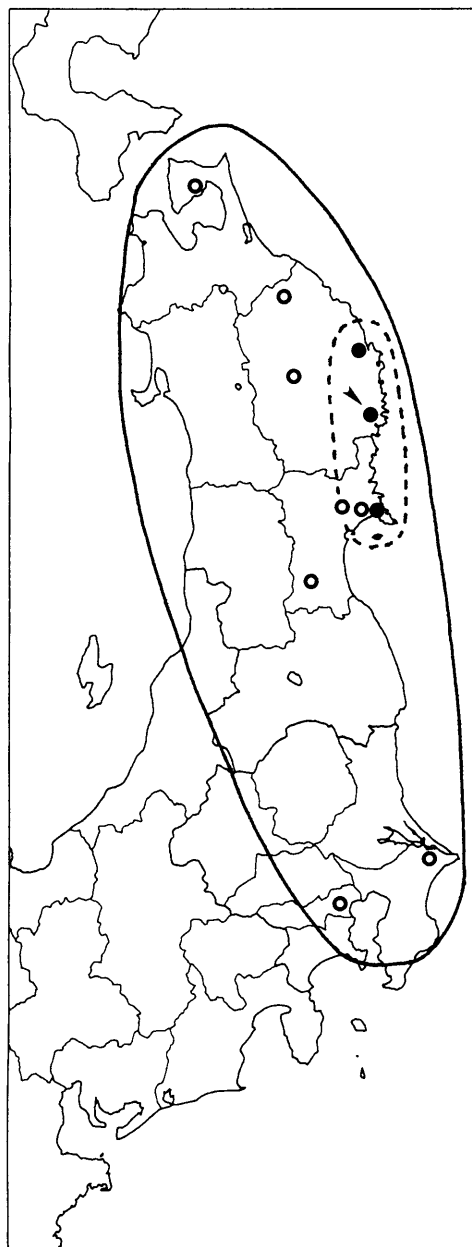
この土器の焼成は良好で外面はよく磨かれ、暗黒褐色を呈している。その所属時期は縄文後期中葉の十腰内IV式期である。

Ⅲ. 人面・足形装飾付香炉形土器の分布

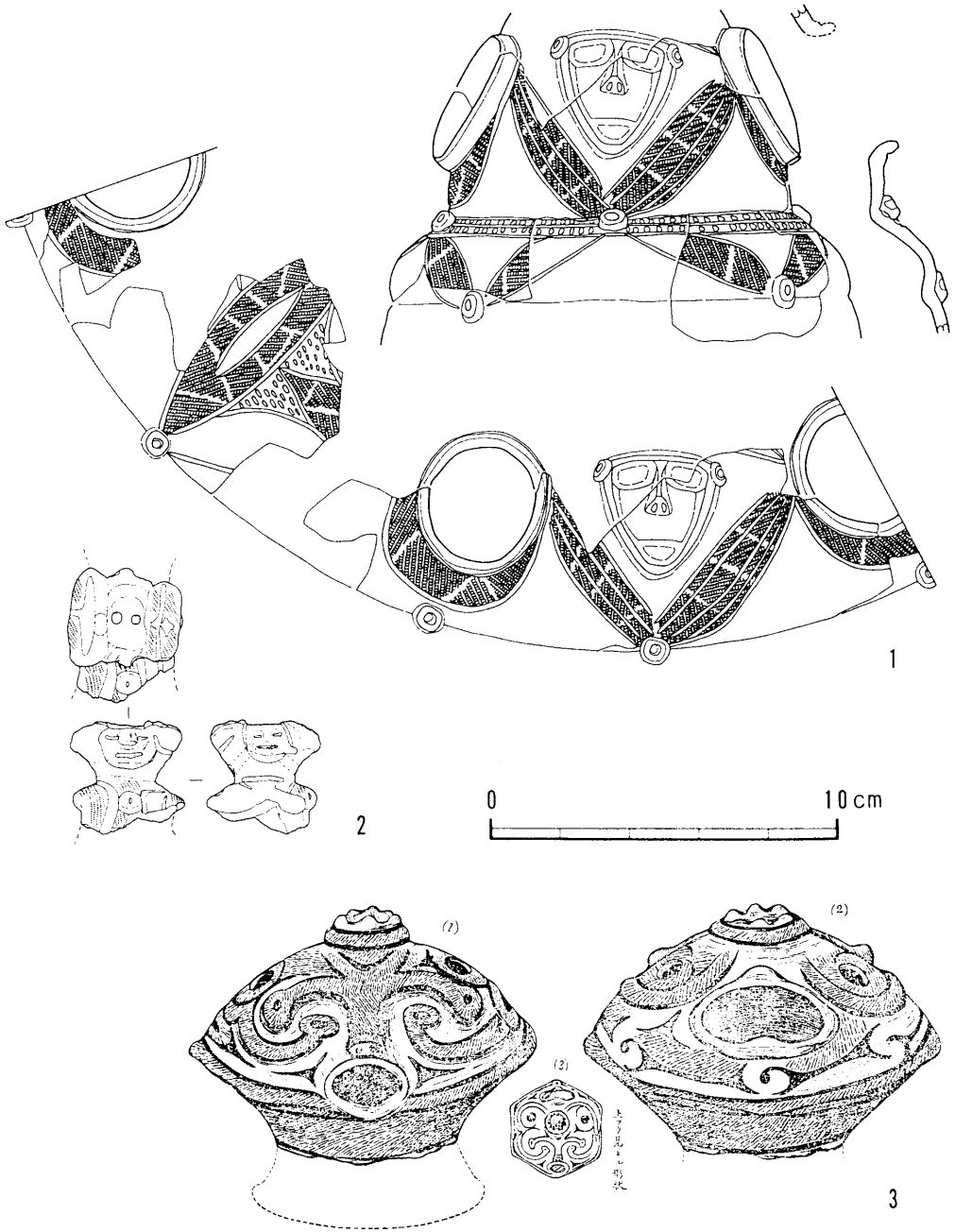
足形装飾付香炉形土器は、本遺跡より北の同じ三陸海岸で1例出土している。岩手県宮古市教育委員会によって発掘された同市近内中村遺跡の出土品であり、同様に4個の足形をもち、その上の3本の沈線や瘤状装飾はきわめてよく類似している。しかしブリッジ部分はまだ復元が行われていない。宮野貝塚例の左右面に相当する部分の装飾はやや退化しているが、同じくその所属時期は後期中葉・十腰内IV式期である。早い報告が期待される好例である。

ブリッジ部分が作られておらず香炉形土器とは言えないが、類似した足形装飾のある台付小型鉢形土器が、三陸海岸南部の宮城県牡鹿郡女川町尾田峰貝塚より1例出土している。照源寺所蔵、女川町生涯教育センター保管(写真2)。

高さ9.0cmで、鉢部前面の口縁部に1対の足形がみられ、口縁部に沿った幅の狭い無文の低い隆帯は、足形の間のみ半月形になっている。足形の大きさは、幅1.4~1.6cm、長さ2.4~2.6cmで、宮野貝塚例より幅はやや狭い。沈線は4本で指は5本に表現されている。足形の間やや下の鉢部中央には直径1.5cmの円形突起があるが、宮野貝塚例のように孔は貫通しておらず、それを取り囲む装飾もみられず、鉢部全体にRLの縄文が施文されるのみで、ブリッジのみられないことも含



第6図 人面・足形装飾付香炉形土器の分布
(○印：人面，●印：足形，矢印：宮野貝塚)



第7図 人面裝飾付香炉形土器実測図
 (1 : 大湊近川遺跡第1例, 2 : 萩内遺跡例, 3 : 下沼部貝塚例)

めて退化形態と考えられ、本来の形態も実際の機能も香炉形土器であると考えられる。黒褐色を呈す。

興味深いことに上面観は膨らみのある長方形を呈している。これは関東・中部地方の縄文後期の注口土器の数例にみられるところの、通常円形である口縁部が女陰を示唆する楕円形に表現されていることと通じるものがある。そして約3分の1を欠失しているため不明であるが、後面にも同様な装飾があったと推定される。上記2例とはほぼ同時期であろう。そして形態・機能の類似性からみて、手とみなす理解(東北歴史資料館1996)には賛成しがたい。

現時点においては上記3例はほぼ同時期であるうえに、三陸海岸に集中していることにも注目される(第6図●印)。

次に人面装飾付香炉形土器をみてみると、青森県から東京都までの次の9遺跡より11例出土している(同○印)。

1 a. 青森県むつ市大湊近川遺跡第1例(第7図1, 写真3-1)

青森県埋文センターの発掘によって2例出土している(坂本他1987)。第1例は第206号住居址の床面より出土したもので、注口土器に類似した形態の上半部で、前面に人面、後面に女陰を示唆する磨消縄文が施文され、両脇に大きく窓が開けられている。残存高10.9cm, 黒褐色を呈す。後期後葉。

1 b. 同大湊近川遺跡第2例(写真3-2)

第2例は第108号住居址の床面より出土したもので、丸い大きな目と左右に大きく開かれた口が特徴的である。台の裾部は復元されて高さ10.4cmで、黒褐色を呈す。後期後葉。

2. 青森県東津軽郡平内町

文化庁所蔵。高さ14.6cm。後期(小林編1977)。

3. 岩手県九戸郡軽米町長倉遺跡例

岩手県埋文センターの発掘品で、未報告資料。大湊近川遺跡第2例に類似する。後期後葉。

4. 岩手県盛岡市葦内遺跡例(第7図2, 写真3-3)

岩手県埋文センターの発掘品で、頂部だけの破片(工藤他1982)。表情の異なる人面が前後にみられ、上面は皿状に凹み、二つの穴は両側面に貫通している。現存高4.0cmで、褐色を呈す。後期後葉。

5. 宮城県石巻市南境貝塚例

後藤勝彦氏の発掘品で、頂部だけの破片(東北歴史資料館1996)。後期。

6 a. 宮城県桃生郡河南町宝ヶ峰貝塚第1例(写真3-4)

宝ヶ峰縄文記念館所蔵品(志間他1991)。完形品。台付きで高さ16.5cm, 褐色を呈す。前面上部に細い目の人面がみられ、頂部は飾られた頭を示唆し、その下部には三角形の透かしがある。後期後葉。

6 b. 同宝ヶ峰貝塚第2例(写真3-5)



写真3 人面裝飾付香炉形土器

(1 : 大湊近川遺跡第1例, 2 : 同第2例, 3 : 葦内遺跡例, 4 : 宝ヶ峰貝塚第1例, 5 : 同第2例)

同じく宝ヶ峰縄文記念館所蔵品。頂部のみの破片で、現存高8.8cm、幅8.7cm。褐色を呈す。人面は前面によく残っているが、後面にもその痕跡が明らかである。頭部は第1例と異なり三つには分かれず一つにまとめられている。両脇の孔は耳飾を示している。後期中葉・宝ヶ峰式期。

7. 宮城県刈田郡蔵王町湯坂山B遺跡例

蔵王町教育委員会の発掘品で、頂部のみの破片（東北歴史資料館1996）。後期。

8. 千葉県香取郡小見川町良文貝塚例

小見川町教育委員会所蔵。高さ16.0cm。後期中葉・加曾利B3式期（小林編1977）。

9. 東京都大田区下沼部貝塚例（第7図3）

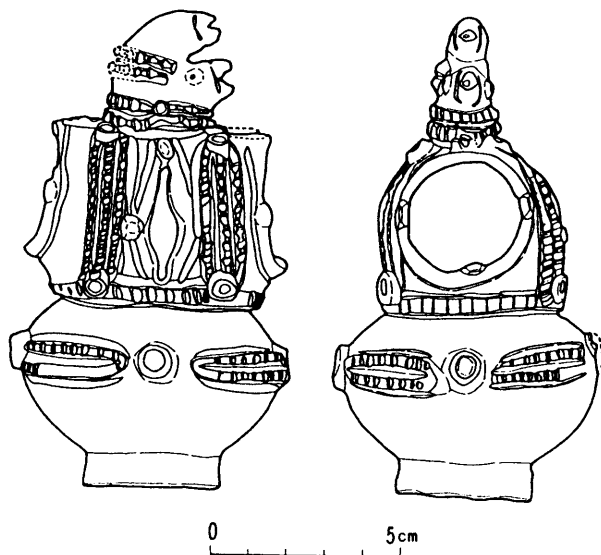
明治時代に飯田長吉氏によって発掘され、最初に報告された人面装飾付香炉形土器である。台部のみを欠き、前面に大きな口と磨消縄文と低い隆帯による目鼻が表現され、後面には大きく穴が開かれている。「土質は黒み勝で幾分か光沢があって赤色の附着されたものが残っている」、と報告されている（大野1904）。晩期初頭・安行3a式期。

以上の人面装飾付香炉形土器の分布する範囲のなかに、3例の足形装飾付香炉形土器が分布しているとともに、その存続時期もほぼ重なっていること注目される。前者は後期中葉、後者は後期中葉～晩期初頭で、後期中葉の後半において重複している。そして深鉢形土器における人面と足形との関係と同様に、香炉形土器においても両者は密接な関係にあると考え、宮野貝塚出土土器の復元に際し上部に人面を付けることにしたのである。

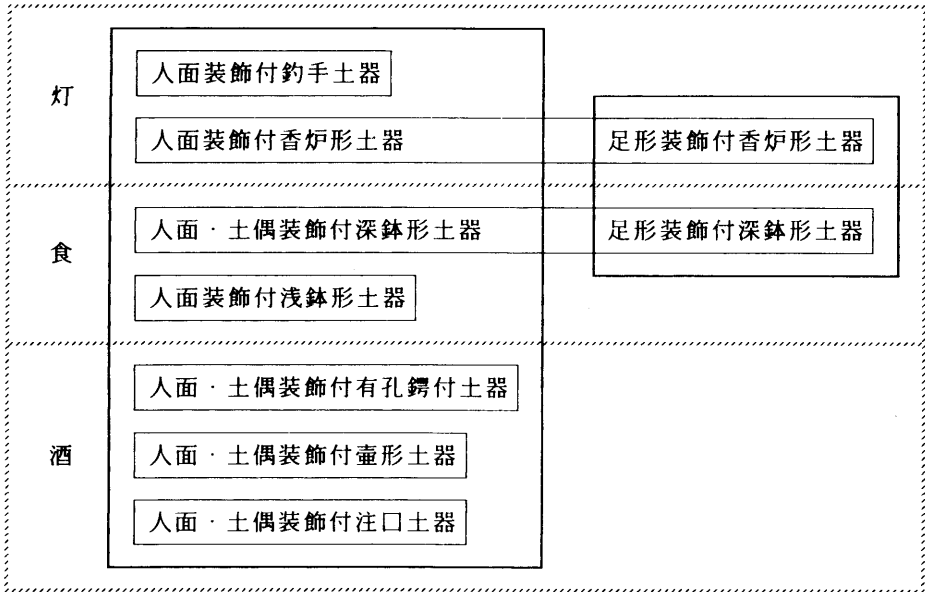
これらの外面的な関係ばかりでなく、内面的にも深い関係があると考えられることを示す興味深い香炉形土器が、青森県むつ市大湊近川遺跡より出土している（第8図）。時期も同遺跡出土の2例と同時期である。高さ12.5cmで、褐色を呈す。

前後面に女陰形の透かしをもち、頂部には大きく口を開けた産卵期の重なりあったサケがみられる。すなわち香炉の火と両性の結合が一緒に表現され、陰部を焼かれながら食べ物などを生み出した日本神話中の女神・イザナギを連想させてくれる。

大湊近川遺跡第1例の後面の女陰も同じような意味をもっているし、下沼部貝塚例の赤色の附着は女神の死を示唆していると理解することができる。



第8図 大湊近川遺跡出土香炉形土器



第9図 人面・土偶および足形裝飾付土器群の関係

IV. 人面・土偶および足形裝飾付土器の関係

農業以前の縄文時代は野生の動植物類に生活を依存していたのであり、それらの食料資源を確保する技術の向上とともに、それらの安定した供給を祈る気持、すなわち死と再生の祭りを発達させていったと考えられる。四季の変化のもっとも顕著な東日本に、人面・土偶および足形裝飾付土器が発達したことも、そのことをよく示している。

人面・土偶および足形裝飾付の各種の器形のなかで、主体をなすのは深鉢形土器である。これは火で焼かれながら身体から食べ物を出す女神を表しているとともに、そのなかで作られ取り出された食べ物が新しい命として食べられる、死と再生の祭りがおこなわれていたことを強く示唆している。その時に浅鉢形土器は、食べ物を供えたり、取り分けたりしたものと考えられる。

また有孔罎付土器、壺形土器、注口土器などは、果実酒を発酵させたり、注いだりするのに使われたものと考えられる。

そして釣手土器・香炉形土器は祭りの時の灯をとすものであるとともに、焼かれて死ぬ女神をも表していて、死と再生の祭りの意義を強調している。

すなわち、各種の人面・土偶および足形裝飾付土器は、祭りの灯・食・酒の3機能を分担していると考えられる。それらの相互関係の想定は、第9図に示すとおりである。

引用文献目録

- 大野延太郎, 1904 : 顔面附着香炉形土器に就いて。東京人類学会雑誌, 225. 163~164頁。東京。
- 工藤利幸他, 1982 : 萩内。岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書. 32。盛岡。
- 小林達雄編, 1977 : 縄文土器。日本原始美術体系. 1。講談社・東京。
- 坂本洋一他, 1987 : 大湊近川遺跡。青森県埋蔵文化財調査報告書. 104。青森。
- 志間泰治他, 1991 : 宝ヶ峰。斎藤報恩会・仙台。
- 東北歴史資料館, 1996 : 東北地方の土偶。東北歴史資料館・多賀城。
- 渡辺 誠, 1995 a : 人面装飾付の釣手土器。比較神話学の展望. 293~307頁。青土社・東京。
- , 1995 b : 底を抜かれた人面装飾付土器。梅原猛古稀記念論文集. 205~217頁。中央公論社・東京。
- , 1997 a : 人面装飾付注口土器の機能について。双葉町史, 別冊1. 285~293頁。福島県双葉町教育委員会。
- , 1997 b : 足を広げた縄文土器。堅田直先生古希記念論文集. 73~80頁。真陽社・京都。
- ・吉本洋子, 1994 : 人面・土偶装飾付土器の基礎的研究。日本考古学, 1. 27~85頁。日本考古学協会・東京。

謝 辞

本稿をまとめるに際しては三陸町教育委員会をはじめとする, 次の諸機関・諸氏より多くの御協力を仰ぐことができた。末尾ながら明記して深謝の意を表する次第である(敬称略)。

青森県埋文センター, 鈴木克彦, 岩手県埋文センター, 高橋与右衛門, 熊谷常正, 竹田将男, 金野良一, 照源寺, 女川町生涯教育センター, 藤沼邦彦, 宝ヶ峰縄文記念館, 丹下昌之, 渡辺直哉。